



藤澤新所長 あいさつ

目次：

藤澤新所長 あいさつ	1
時間学公開学術シンポジウム 2016 開催報告	2
【共催】放送大学講演会 開催報告	2
サロン時間学 ご案内	3
第 1 回時間学国際連携会議 開催 報告	3
時間学ミニ辞典	3
お知らせ 『アフタヌーンセミナー in 福岡』	4
所長コラム	4
時間学研究所監修本 発行	4

新しい学問を作ること

時間学研究所所長の藤澤です。甲斐前所長の後を継ぎ、2016 年度から時間学研究所所長を務めています。時間学研究所には現在、専任所員、教員および研究員、事務員あわせて 15 名が在籍し、時間学という新しい学問の構築及び発展に向けて研究を行っています。

時間学研究所の発足は独特なものでした。2000 年当時、学長だった広中平祐先生の発案により、「時間という観点から研究者間の交流を図り、新たな学際領域を創造するとともに、その成果の社会的な還元を行なうこと」という目的をもった研究所として始まったのです。学問の名前と目的が先にあるという、トップダウン式で新しい学問の創設を目指しているのです。

果たしてこの試みは成功するのでしょうか？ 形式から始まった時間学が新しい学問として認められるには、内容の充実が必要です。また、保守的な学問世界——保守的であることは学問に必要な性質の一つです——の中で、トップダウン式の学問が成立するには、それが多くの人の興味と関心を引き付けることが必要です。

さいわいなことに、時間学は多くの人に受け入れられる性質と魅力を持っていました。まず、時間はあらゆる事象に関係し、したがってあらゆる学問分野に結びつきます。これをお読みのみなさんも、何らかの形でご自分の課題と時間を関連させることが可能でしょう。また、時間のもつ性質、たとえば時間が人間の生活を支え、あるいは支配していること、あるいは時間を自由に移動できないことといった性質が、時間について考えることに対する独特の魅力を生み出します。

このような魅力に惹かれた学内外の多くの方の寄与により、時間学および時間学研究所は発展してきました。まだまだ発展途上のこの学問に、今後も多くの方が様々な視点と方法を持ってご参加いただくことを、そして清新な価値をもった学問体系を構築することにお力添えをいただくことを、心より願っています。

時間学研究所ニュースレター
2016 年度第 1 号をお届け
します。

《時間学研究所》
〒753-8511
山口市吉田 1677-1
TEL/FAX：083-933-5848
jikann@yamaguchi-u.ac.jp
www.rits.yamaguchi-u.ac.jp





時間学公開学術シンポジウム 2016 『紛争後社会の再生と記憶』を開催

去る平成 28 年 6 月 11 日、京都工芸繊維大学 60 周年記念館・記念ホールにて時間学公開学術シンポジウム「紛争後社会の再生と記憶」を開催しました。紛争という暴力的な過去を経験した社会と個人の回復にとって、紛争当時の出来事を社会的に開示し共有することは、どのような意味を持っていると理解できるか。体制転換後において紛争時の出来事をあかみにする試みは、どのような主体によって、どのような仕方で行われ、またどのような現実や思想を事後的に触発することになるのか。このような問いについて考えるという趣旨のもと、阿部利洋先生（大谷大学文学部・教授）、福間良明先生（立命館大学産業社会学部・教授）にご講演いただきました。まず阿部先生の基調講演「過去に触れつつ遠ざける」では、冷戦後のアフリカ・ラテンアメリカ・アジア地域の内戦経験社会で、紛争時の出来事が公的回路を通じてどのように表象されてきた（いる）のかについてお話いただきました。南アフリカやカンボジアなど、紛争から日常への移行期にある一連の地域で見られる公的紛争記憶表象の制度・施設（法廷、真実委員会、メモリアル施設）が固有の仕方で行った犠牲・加害の記憶を開示しつつ、それらの記憶を空間的・時間的に隔離するという二元的な作用を含んだ装置であることを、現代の紛争後社会の文脈に即しつつ講演いただきました。続いて福間先生のコメント「記憶の「封印」と「発明」の歴史社会学」では、大戦終結直後から 1960 年代前後の日本社会についての事例（極東国際軍事法廷、各地域の戦跡・モニュメントなど）をふまえて、（１）司法を通じた過去処理の限界や不十分さが意図せざる結果として紛争記憶の開示・共有によって肯定的な作用をもたらす点には大きく同意できること、（２）ただし紛争当時の政治社会状況に即したときに加害者たちが帯びるある種の「正しさ」＝正統性や、真実委員会の場で作用する固有の力学を考慮する場合、紛争後社会の過去処理モデルには一定の限界も



認められること、等々、基調講演について精緻な批判的検討を加えられました。映像・写真資料を駆使しつつ、紛争の記憶をめぐる現代政治のさまざまな容貌が語られるお二人のお話に、来場者の方々も熱心に聞き入っていました。福間先生のコメントに続き、両講師によるディスカッション（加害者・被害者の弁別の難しさ、「責任」の独特な意味などについての討議）、ならびに会場との質疑応答が行われ、会は盛況のうちに閉じました。



【共催】 放送大学公開講演会『宇宙の神秘と地球の謎に迫る』を開催

7 月 3 日（日）山口大学大学会館において、放送大学山口学習センター主催の放送大学公開講演会が開催されました。この講演会には本研究所も共催し、藤澤健太所長が講演を行いました。「星の形成とブラックホールの謎」と銘打った講演では、星がどのように誕生するのか、またブラックホールを取り巻く多くの謎や最新の研究成果について話されました。その後、加納隆先生（放送大学客員教授、本学名誉教授）が「大自然はすばらしい、地球の魅力再発見の旅」のタイトルでお話しされ、加納先生が世界各国で収集してきた数億年前の石を実際に触れることが出来るなど、参加者にとっても貴重な体験となりました。「ふたりのトークショー」では、会場からの質問にそれぞれの視点で回答をするなど、大変盛会となりました。



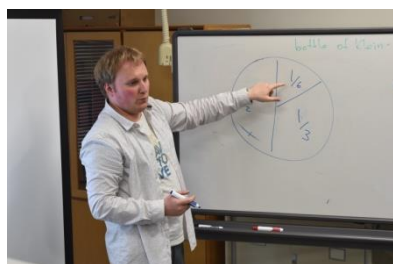
サロン時間学



第1回 時間学国際連携会議を開催

ヒトの時間、社会の時間、機械の時間、心の時間・・・
この世のあらゆることから時間と関係しています。どこにどれだけ「多様な時間の姿」があるのか？
研究の話でも、突拍子のない考えでも、便乗発言、大いに歓迎！分野を問わず参加可能です。何か新たな発見があるかもしれません。皆様のご参加をお待ちしております。

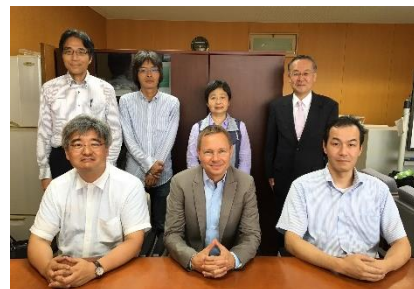
サロン時間学で話題提供をしてみたいと思われる方は研究所事務室までご連絡ください。



第15回の様子

話題提供者
ティシチェンコ・セルゲ 准教授（特命）
時間学研究所

2016年8月1日、京都工芸繊維大学にて時間学国際連携会議が開かれ、藤澤所長をはじめとした研究所関係者が参加しました。国際時間学会と時間学研究所との提携の仕方や今後の方向性について様々な角度から検討するという趣旨のもと、シュタインネック・ラジ国際時間学会会長をお招きし、学会・研究所双方の概要紹介をふまつつ、会長と所長との間で活発な意見交換と提案が行われました。



時間学ミニ辞典



1930年代のスーダン南部を生きた牧畜民たちは、ある興味深い時間感覚・表現を共有した。かれらは時間を知覚・表現するための「照合点」として共有財である牛を用いていた。つまり日が昇っている間、家畜が行う気まぐれな運動や、家畜のためにかれらが行う諸々の労働が、1日を区切る諸々の基準点を構成した。およそ70年前に文化人類学者が報告したこの〈牛時計〉には、かつてのアフリカ大陸にはのんびりとした時間がながれていた、というような、単純かつ暴力的な解釈を超えた含みがある。つまり家畜の不規則な運動を参照項としつつ1日を区切り表現する「ヌアー族」の技法は、近代ヨーロッパ的時間に馴致された人間に対して、それを相対化する視点を提供してくれるものである。人間の生活世界から切り離された外部に実在し、均一の速度で経過・流通し、あたかもマテリアルな力のように人間生活を拘束する——ヌアーの人びとにとって〈時間〉はそのような対象では全くない。より正確に言えば、そもそも数値化・外化されていないのだから、かれらにとって〈時間〉は原則的には対象化されることがないし、経過もしない。かれらにとって〈時間〉はどこまでも（家畜を中心とした）諸々の出来事のスナップ・ショットとして間欠泉的に現象し、知覚される。こうした〈牛時計〉の機構をとおして知られるのは、ヌアーの人びとではなく近代西洋の時間意識の特異性なのである。

【文献】

E. E. エヴァンズ＝プリチャード、1979、『ヌアー族』向井元子訳、岩波書店。
真木悠介、2003、『時間の比較社会学』岩波現代文庫。

お知らせ

【時間学アフタヌーンセミナーin 福岡】

ー アンモナイトの死骸は浮くか沈むか？ー

日時：平成 28 年 11 月 11 日（金）

14 時 00 分～16 時 00 分

場所：アクロス福岡円形ホール

（福岡市博多区天神 1－1－1）

講師：前田晴良 先生

（九州大学総合研究博物館・教授）

チラシ

時間は物理学者の所有物に非ず

私の専門は宇宙物理学です。かつて物理帝国主義という言葉があったように、20世紀半ばのある時期、多くの物理学者が無意識のうちに「物理学は偉い学問である」と考えていたようです。時間に関する概念も、暦、時の体系構築、時間計測の手法など、物理学が基礎となる部分が多く、時間は物理学の専売特許のように考えている物理学者は現在でも多いのです。

しかし、物理学を発展させてきた20世紀的手法、すなわち要素還元的かつ対象を観測者（人間）からできるだけ切り離すという方法は、21世紀には見直しを迫られています。すなわち、量子情報・観測の問題、非線形科学、宇宙論における人間原理など、考察を行う主体である人間も含めた取り扱いが近年、重視されています。

人間を対象とするのは人文・社会科学の領域ですし、工学、医学、農学、経済学、法学、教育学などいわゆる実学はそもそも直接人間に役立つことを目指しています。そしてあらゆる学問分野に時間にかかわる重要な概念があります。

時間は物理学者の所有物に非ず。これは私が時間学研究所で学んだ大切な知識の一つです。

時間学研究所監修

『ふしぎ？ふしぎ！〈時間〉ものしり大百科』 発刊

ミネルヴァ書房より、時間学研究所監修の子供向け図鑑が発刊されました。

全3巻で『時間』の成り立ちの歴史から、天文学、地学、宇宙物理学、生物学に至るまで、さまざまな科学的視点に及ぶ。



第1巻

見える〈時間〉
くらしに役立つ時計と暦



第2巻

飛びこえる〈時間〉
タイムマシンのつくり方



第3巻

感じる〈時間〉
生き物の体と時間